春風秋雨

江利川毅 県立大理事長

本を薦める

つながる「知の輪」

本を薦めることに躊躇（ちゅうちょ）していた時期がある。本の内容によって、薦める人の力量や見識が推し量られてしまうからである。

■書を通じ研修

私が思い切って人に本を薦めたのは、1990年代の初頭、厚生省（現厚生労働省）の薬務局経済課長の時である。当時は日米構造問題協議が行われていて、日本市場の閉鎖性の改善、日本独特の流通慣行の是正が求められていた。医薬品は、消費するのは国民で選ぶのは医師という特殊な商品である。医薬品の流通は医薬品卸業者が担っているが、強いメーカーと強い医療機関の影響の下に商慣行は歪（ゆが）んだものになっていた。

それを正すためには医薬品卸業者が旧来の殻を破り主体性をもって取引する、そういう流通を確立することが急務であった。もちろん、メーカーや医療機関に対しても意識改革や取引慣行の改善への取り組みが求められていた。

私は医薬品卸業者の幹部に対する研修の際に、思い切って三つの本を薦めた。「論語と算盤」（渋沢栄一）、「SISは企業を変える」（那野比古）、「上杉鷹山」（童門冬二）である。

ただ、「論語と算盤」は在庫がなかったので、増刷されたら皆さんにプレゼントすると約束した。数か月後に130冊購入して研修参加者や医薬品メーカーの幹部にお渡しした。

予想以上に好評で「教わることが多く何度も読み返している」「あまりにも開明的で、明治時代の人が書いたとは信じられない」などの感想が寄せられた。課題が山火事状態で世間から叱咤（しった）され続けている厚生労働省、その若手職員の心を鼓舞したいと思い、省内幹部から、厚生労働省職員なら当然読むべき本、ぜひ読んでもらいたい本を3冊ずつ推薦してもらった。推薦者ごとに推薦図書を一覧表にし、厚生労働省の基本知識・基本精神を引き継いでいく縁になるようにと思いを込めた。また、「上杉鷹山（上）は会社の経費で買って役員に渡し、良いと思ったら（下）は自分の金で買って読め」と言っていると話してくれた人もいた。

■精神継承の縁に

推薦図書の提示を組織的に取り組んだこともある。1回目は厚生労働事務次官の時で、政策統括官室がその事務に当たった。

2回目は人事院総裁の時で、学識経験者や幹部公務員経験者から良書を推薦していただき、公務員研修所が「若手行政官への推薦図書」としてまとめた。今後の国家行政を担う若手行政官に、国家公務員として矜持と情熱を持ち続けてもらいたいとの思いから行った。推薦図書は研修所のホームページから見ることができる。なお、推薦者に対し予期せぬ批評が行われないよう、推薦者は一覧にまとめ、誰がどの本を推薦したかは分からないようにした。

3回目は1年半前、埼玉県立大学においてである。学長補佐という特命事項を担当する新たな役職を設けた。その特命の一つが「埼玉県立大学を保健医療福祉の分野の大学として日本一にするにはどうしたらよいか」で、プロジェクトチームを作って検討してもらった。

その成果の一つが「教職員推薦図書」の作成で、知識の幅を広げ教養を高める観点から学生にぜひ読んでもらいたい本68冊が推薦者名と推薦理由を添えてまとめられている。

■活字と想像

私は今でも時々、本をプレゼントしている。講演を頼まれたとき、相手が保健医療福祉に係る人の場合には「人生の最終章を考える」（公益財団法人医療科学研究所監修）。人事異動する後輩に、あるいはお世話になった周りの人に、激励や感謝の気持ちを込めて贈っているのが、「活眼活学」（安岡正篤）、「人物を創る」（同）、「南洲翁遺訓」（西郷隆盛）、「置かれた場所で咲きなさい」（渡辺和子）、「心に響く小さな5つの物語」（藤尾秀昭）などである。

いい本をいただいたと言われると、こちらもうれしくなる。インターネット、AI（人工知能）の世界が広がりつつあるが、活字をしっかり見て、イメージを膨らませながら味読していくことは、どのような時代になっても大事なことだと思うのである。

（次回は8月28日付）